

『徒然草』研究の序章

土屋 博 映

一 序段について

つれづれなるまゝに、日ぐらしすゞりにむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。(大成・本文)

何かしたいがすることもない、独り居の所在なさにまかせて、終日硯にむかつて、心に映つては消えて行くとりとめもないことを、あてもなく書きつけたところが、いやどうも変に氣違ひじみた心持ちになつたよ。(大成・訳)

☆右に掲げたのは、本文・現代語訳ともに『徒然草解釈大成』(以下「大成」と呼ぶ)による序段の部分である。(☆は筆者の見解)
つれづれなるまゝに、日ぐらし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ(全集・本文)

なすこともなく、ものさびしさにまかせて、終日、硯にむかつて、

心に浮かんで消えてゆく、つまらないことを、とりとめもなく書きつけていると、我ながら何ともあやしく、もの狂おしい気持ちがすることではある。(全集・訳)

☆右に掲げたのは、本文・現代語訳ともに古典文学全集(小学館、以下「全集」と呼ぶ)による序段の部分である。

☆大成と全集の本文とを比較すると、次のような相違がある。

まず濁点の例をあげる。

○日ぐらし(大成) ↓日ぐらし(全集)

次に表記の例をあげる。

○つれづれなる(大成) ↓つれづれなる(全集)

○すゞり(大成) ↓硯(全集)

次に読点の例をあげる。

○日ぐらしすゞり(大成) ↓日ぐらし、硯(全集)

☆現代語訳では、次のような対応がある。

○何かしたいがすることもない、独り居の所在なさにまかせて、

(大成)

○なすこともなく、ものさびしさにまかせて、(全集)

○終日硯にむかつて、(大成)

○終日、硯にむかつて、(全集)

○心に映つては消えて行くとりとめもないことを、(大成)

○心に浮かんで消えてゆく、つまらないことを、(全集)

○あてもなく書きつけたところが、(大成)

○とりとめもなく書きつけていると、(全集)

○いやどうも変に氣違いじみた心持ちになったよ。(大成)

○我ながら、何ともあやしく、もの狂おしい氣持がすることではある。(全集)

☆対応させてみると、あまり違いがないようではあるが、心なしか、古来からの訳をそのままのみにしているような氣がしてならない。そういう訳の内容が、実感として心にひびいてこないのである。『徒然草』でもっとも重要な——方向性を示すものとして——段とも言われているのだが、はたして本当に重要なのか、またそのような訳でよいのか。実は、そうだという先入観で適当な、まさに適当な訳の模倣をしているのではないかとばかり疑われてしまうのである。

二 つれづれなるままに

☆ここでは「つれづれなるままに」が、どのような意味でとらえ

られているかを、大成により、整理してみる。

1 ① 「退屈」「所在なさ」を意味の中心とするもの。

2 ①に「さびしさ」の感慨を添えたもの。

3 ① 「独居」ということに重点をおくもの。

4 ① 創作意欲の面から解釈するもの。

2 他の物事に心がまぎらわされたりすることがなく、閑かな澄

んだ心境を自ら味わいうるような閑散な境界である。

3 ① 『枕草子』(跋文) にならって書き出したものである。

2 日記随筆文学の類型にしたがったままで、枕草子の跋文に

似ているのは当然であるから、ならって書いたという旧説には従えない。

☆以上のような項目に分かれている。代表的な見解は、1の①、1の②であり、そこから1の③と、1の④という考えが生まれてくる。2は少々問題ありである。「つれづれ」という言葉自体、語源や用例を見ても無理ではないかと思われる。また3の①はどうだろうか。大体跋文を序文にするというのもおかしいし、「つれづれ」の重みもまったく異なるのであるから、肯定できない。また3の②の日記随筆文学の類型にしたがったというの謙遜的な表現という範囲においてならまあまあ納得いくが、決して、他の類型の域にとどまるものではないと、考えられる。

三 日ぐらし

☆ここでの大成の注は次のようなものである。

① ヒグラシ

② ヒクラシ (山田孝)

副詞で、一日中、終日の意。

☆意味的には、一応表面的には問題はない。しかし、濁点の存否、また語構成については一考の必要があると思われる。それが結果的に意味に影響を与えることになるかもしれないが、大成はこれを大して重要とはとらえていない。

四 硯にむかひて

☆ここでの大成の注は次のようなものである。

筆を執る意を修辭的に言ったのである。

☆これ自体については問題はないのだが、「日ぐらし (日ぐらし)」「との関係がどのようなものになるかは、無視できない。しかし大成はそれにはふれていない。

五 心にうつりゆく

☆ここでの大成の注は次のようなものである。

① 「浮」説。それからそれと心に浮かんでくる

② 「移」説。変わってゆく。つぎつぎに移る。

③ 「映」説。心の鏡に映っては消え、映っては消えてゆく。

☆これについては、「心に」に注目すればある程度の方向性はあると思う。ただし③の「映」も「映る」のみであろう。「映っては消え」の「消え」は意識のしすぎではないか。

六 よしなしごと

☆ここでの大成の注は次のようなものである。

① 深いわけもなにもないこと。

② 書いてもしかたのないこと。何の根拠もないつまらないこと。中心に本筋のないこと。

③ たあいもないこと。とりとめもないこと。とるに足らぬこと。つまらないこと。

☆これについては、①から③に分類するだけの必然性があるのかという疑問が残る。よくみれば、みな同じことを言っているのはいか。それよりも「よしなきこと」ではなく、「よしなしごと」であることに、もつと注目すべきではないかと思う。

七 そこはかとなく

☆ここでの大成の注は次のようなものである。

① ① 何となく。とりとめもなく。何ときました事 (方針・目的・考え) もなく。

② 順序もなく。

2 ① 「其処は彼」

② 「其処計」

☆これについては「そこはかたなく」という慣用表現として認めるか、「其処」に独立性を見出すかという点が問題である。また「はか」をどうとらえるかという問題も存在する。

八 あやしうこそ

☆ここでの大成の注は次のようなものである。

① 何ともはや妙に。変に。

② 「見苦し」の意を含む。

☆これについては「見苦しい」気持ちまで含むかが問題である。「ものぐるほしけれ」を修飾すると見れば、それは無理なのではないか。

九 ものぐるほしけれ

☆ここでの大成の注は次のようなものである。

1 ① 狂気じみている。

② 物狂おしい。

③ わけのわからぬものである

④ ただごとでないような感興を覚える

2 ① 主語は「われ」

② 主語は「書きあがったもの」

③ 主語は「書いている気分も書きつけられてゆく文も」

④ 主語は「書きつけること自体」

3 ① 謙遜の辞である。

② 卑下語とは見ずに、近代的な解釈を加えて、自分ながら予期せぬほど創作の感興が高ずるのを感じるとも解釈できよう。

③ 枕草子からの影響。

☆これについては、大変な問題がある。一つにはどのような訳がよいか、もう一つには主語が何かということである。訳については、「硯に向かひて」、「書きつくれば」で、狂気じみた気持ちになどなるわけがない。1については、いずれもどこかしらしっくりこない意味である。2については、①か②であろう。①か②によって、意味にも違いが出てくる。3については、①が妥当である。②は無理。③については、先行文学としての影響は受けているが、序文として直接の影響を考へるのは無理だろう。

十 序段の鑑賞について

☆ここはすべて大成による。

1 この書全体の序である。ほんの随筆で、もとから何の主張・目的・寓意があるわけではないことわっている(内海・塚本) ☆全体を意識してのものかどうかは輕輕しくはいえないと思う。

2 目的もなしにただ感想や印象を片端から書きつけただけだと

ことわったあと、「あやしうこそものぐるほしけれ」と、自分で人より先に罵っているのがいかにも如才ないが、読者は誰が何と言おうと、思ったままを書いたのだから、どうしようもないのだという堂々たる文士の述作態度を認めてやらねばならない。「あやしうこそものぐるほしけれ」は、しばらく書いていて、その書きおわったところを顧みての評である。「日ぐらし」は、書き始めた第一日の様をのべたと見るのがよい(沼波)

☆「如才ない」とか「堂々たる」とかは主観的な評で好ましくない。
3 この序文が、全巻の気分・情調をもっとも簡潔に鮮やかにのべつくしている(塚本)

☆全巻の気分・情調、とまでは輕輕しくは言えない。

4 何の目的も主張もなく書いていったもので、自分でさえ、変に思うのだから、他人は何とみることかと断ったのである(吉川)

☆何の目的も主張もなく書いていったものであろうか。それでは作品の存在価値はなくなる。

5 徒然草はいまさらの事ではないが、それはある目的を以て書かれた系統のある書でなく、臨時の感想録、印象録であり、随筆であります。作者自らも「あやし」といい、「ものぐるほし」という程、そこには混乱錯雑の心の相が写って居ます。(山口)

☆簡単に「ある目的を以て書かれた系統のある書でなく」とは言えないと思う。

6 この一段は、徒然草全体の序というべきものであるが、元来は序とか序段とか、或は何段とかには分けてなかった。徒然草を段に分けたのは、寿命院抄が始めてであり、節に分けたのは文段抄である。ともあれ、まずこの序段を書いてから筆をすずめていったので、「書きつくればあやしうこそものぐるほしけれ」の意味がはっきりしないけれど、古人はそう厳密に物を考えたわけではあるまい(佐野)

☆まずこの序段を書いてから筆をすずめた、ははたしてどうだろうか。

7 この段は全体の総序として、著作の動機、執筆状態、内容、体裁、気分などにわたって記している。短文ながら多くの内容をこめているので、引き締まった含蓄の多い文章となっている。この段は、次の段と不即不離の関係があるので、すぐ次に続き、段として切れないという説もあるが、やはり総括的な一段とみた方がよいだろう(武田)

☆「引き締まった含蓄の多い文章」とは主観的な評である。「総括的な一段」とも簡単には言えない。

8 「つれづれ」は、古来種々に解釈されているが、第七十五段と照応してみると、決して退屈無聊なものでもなく、澄み入った楽しむべきものであったと見なくてはならない。そのような心境において、人事自然のさまざまの姿が、彼の心の鏡に、次々と映り来るのである。「よしなしごと」とは価値の乏しい

という謙遜の辞であるが、それは他人から見ればであって、兼好自身には興味もあり、また価値のある事柄であった。それを「そこはかとなく書きつける」とは、一定の目的をもって、体系立てたり、理論立てたりして論述するのではなく、思い浮かぶままにその心理的必然さを追って書いていくのである。したがって、出来上がったものは、他人がみるよりも、自らこれを読みかえすときにあわれ深く、心ゆくものとなるのである。他人の冷静な眼で見たならば「あやしうこそものぐるほしけれ」であろうが、兼好としては、あえてそれを矯め直す必要はない。他人は他人、自分は自分であるという、綽々たる余裕感、超脱の心境で書いているのである（能勢）

☆「澄み入った楽しいむべきもの」であったというのはどうだろうか。

9 終日執筆した何枚かの原稿を読み直した感想の体裁ではあるが、全体の序である。「よしなしごと」「あやしうこそものぐるほしけれ」と謙遜の辞をおくのが古来の序や跋の定型である（橘）

☆謙遜の辞をおくのはいい、しかしその表現は決して定型ではないと思う

10 つれづれの状態と、「ものぐるほし」の心境とには、多分に矛盾する性格がある（斎藤）

☆別段矛盾はしていない。

11 作者の執筆の心境・態度・反省を簡潔にのべた総序。若干書

きあげてから、ある時にふと書き添えた序であると見てよい（松尾）

☆大体納得はいくが、「簡潔にのべた」という意識はなかったろう。

12 この序文は、本文が多少なり、または全部なりが出来たらあとで書いてつけたかと思われる。枕草子の心構えと筆致とを承けついでいる（山岸・三谷）

☆枕草子の心構えと筆致を受けついで、というのは言いすぎである。

13 この本の性質をずばりと言っている。しかも「あやしうこそものぐるほしけれ」と言っているが、内からあふれるものを感じ、書きたい事が頭にうずをまいてる感じである。内容が充実して調子はどこもだれていない。書きたいことだけを書いて無駄がない（実篤）

☆「書きたいことだけを書いて無駄がない」とは実篤の主観である。

14 この序は字面だけから見ると、枕草子跋文、方丈記の末尾、堤中納言物語「よしなしごと」中の一文に通じた所がある。いずれも末尾にその成立事情を説いているが、特に堤中納言物語の語句の類似は本書の成立・価値に相互に関係する。「よしなしごと」という語が、「よしなきこと」という語から出来たとすれば、徒然草は堤中納言物語以後の成立と確認され、徒然草の冒頭の獨創性はなくなる（白石）

☆「通じた所がある」というのは偶然に近いと思う。それほど兼好は意識していなかったらう。「よしなきこと」から「よしなしご

と」が成立したという考えも納得しがたい。

15 この段は随筆文学の性格を語ったものとして人口に膾炙している。作者は自由な態度で自己に直面して筆を執っている。謙遜した言葉づかいは、序文の常の姿である（富倉）

☆言っていることに間違いはない。

16 「つれづれ」とは展開なき沈滞のなやみ、充実した人生を見出し得ざる悶えではあるまいか。兼好が

つれづれなるままに日ぐらし硯に向かひて云々

と書いた序文は、充実した生活、展開する思惟に入ることができぬ。この途を見出さんがためには分裂した刹那の断想をそのままに誌して我が姿を如実に眺めなければならぬ。然るに何という混乱した姿であろう。そして統一に赴くべき途も見出し得ない故に、物狂おしさを感じるといふ如き意味ではなからうか（土居）

☆「混乱した姿」は言いすぎである。「物狂おしさを感じる」のも同様。

17 「物狂ほしけれ」は寿抄に「謙退の辞也」とあるのが正しく、狂気なり、狂人ジミテイルは原始的用例で、相手をたしなめたり、謙遜自評などに軽い意味で用いる用例もあり、軽重の二つの用例がある（橘）

☆そのとおりであると思う。

18 「つれづれ」を退屈・無聊・所在なさ・徒然等と訳し、『つれ

づれ草』は退屈しのぎに書いた様に見えるのが定説の様だが、

私は従えない。大言海の「独り物を思ひつづけてながめてある」でも説明が物足りない。多くの用例について見ると、焦慮・煩悶・慷慨・不平その他、喜怒哀楽何くれと抑えがたいものを懐きつつ、四囲の状況又は何かの事情で、手を拱いて、事の推移に任せている心の情態、即ちいらだたしさを抑えていてしかも表面の平静なのを表す語である（野村）

☆「いらだたしさを抑えていて」はなかなかいい。

19 兼好は、徒然なるままに、徒然草を書いたのであって、徒然わぶるままに書いたのではないのだから、書いたところで彼の心が紛れたわけではない。紛れるどころか、眼が冴えかえって、いよいよ物が見え過ぎ、物が解り過ぎる辛さを「怪しうこそ物狂ほしけれ」と言ったのである。この言葉は、書いた文章を自ら評したとも、書いて行く自分の心持を形容したとも取れるが、彼の様な文章の達人では、どちらにしても同じ事だ（小林）

☆婉曲的にもとれる表現だが、的を得た内容と言ってよい。

20 序段を全篇の総序とする考え方は飛躍がありすぎる。ありのままに自己の制作境を飛躍したことが、結果として随筆文学の形成過程を示すことになったまでであろう（安良岡）

☆なかなかよいためである

21 「ものぐるほし」は、常軌を逸しているくらいうち興じている状態、熱中しているさま等を、第三者があるいは自らが評す

る語である。そうして見ると、その没頭しているさまは、次々に筆がすすんでいくことに対する作者の喜びさえ感じている。また、本段は全般を書き上げてから謙退の意味で書いたとする説には従い難い(宮崎)

☆「作者の喜びさえ感じている」というのは言いすぎであろう。確かに「全般を書き上げてから」はいいすぎである。

十一 小松英雄の説(『徒然草抜書』・つれづれなるままに)から

1 『徒然草』の冒頭に記された「つれづれなるままに」とは、することがなくて退屈だから、ではなく、すればすることがあるのに——あるいは、あるはずなのに——、支障ないし事情があつて手がつけられず——あるいは、手がつかず——、空白になつた時間をもてあまして、というつもり表現であると考えれば、よく理解できそうです。取り残されたまま、使ひようのなくなつた右側の紙面と同じような、「徒々いたづら」な時間です。約束に遅れた恋人を、なにも手がつかずに待っている状態を(退屈)とは言いません。

右のような含みを取らずに、「つれづれなるままに」を、「退屈なのにまかせて」と単純に理解したのでは、大切なところが欠落してしまいます。

☆「空白になつた時間をもてあまして」というとらえかたがよいだろう。

2 うらうらとのどかなる宮にて 同じ心なる人三人ばかり 物語などして まかでてまたの日 つれづれなるままに 恋しう思ひ出でらるれば 二人のなかに

袖ぬるる荒磯波と知りながら ともにかづきをせしぞ恋ひしき(更級日記)

ここもまた、「つれづれなるままに」という表現になっています。気の合う仲間たちと宮仕えの苦勞などを語り合つて別れた翌日、心に穴があいたようで、なにも手がつかないこの状態を、(退屈)ということばで説明したら見当はずれになるでしょう。

☆「心に穴があいたようで、なにも手がつかない」気持が正しい。

3 つれづれと降り暮らして しめやかなる 宵の雨に 殿上にも ささをさ人少なに

御宿直所も 例よりはのどやかなる心地するに(源氏物語) 「と」が後接して副詞になつていても、根幹は同じですから、「つれづれ」が、すつきりしない、さっぱりしない、あるいは、さばさばしない心理状態を表していることに変わりはありません。この文脈では、降りつづく雨に行動が制約されて、うんざりしている気持が、「つれづれ」という表現に含意されると理解すべきでしょう。

心情的な動詞と共起していなくても、この語がもつばらわだかまりのある、すつきりしない心理状態について用いられるの

は平安時代以来の伝統です。

降り止まぬ雨で、用のない人たちは顔を見せず、また、来ていた人たちも早く帰ってしまつて、殿上には宿直の当番ぐらいしかいない状態の表現ということなら、「降り暮らしてしめやかなる宵の雨に」だけでよいでしょうから、その前に「つれづれ」とあることには、別の意味が含まれていなければなりません。

「降り暮らして」は、〈明るいうちに降りはじめた雨が暗くなつても止まずに〉という意味ですが、「つれづれと」によつて、うつとうしい気持が加わっています。止むか止むかと、ずっと待ちつづけていたのに、とうとう降り止まず、ということでしょう。そうだとしたら、殿上にいる人たちは、雨に降りこめられて、うんざりした気分になつていた、という場面設定に、この「つれづれと」という語は決定的な役割を果たしています。そういう雰囲気の中で始まつた女性談義は、現代風というなら、さしずめ、ストレスの解消というところでしょう。「雨夜の品定め」の冒頭における「つれづれと」の役割を『徒然草』の冒頭に結びつけて考えるなら、この一節は、兼好が前向きな心理状態ではなく、習慣的に筆をとつたが書くべきこともないので、脳裏に浮かんだ事柄をつぎつぎに書き記し、それによつてストレスを放散した、と表現していることになります。

「つれづれと降り暮らして」と同じく、「つれづれなるまま

に」ということばが、文頭におかれて、心理的な場面設定——ムードづくり——の機能を果たしていることは、このことばを削除して読んでみればよくわかります。

☆小松の述べた内容で「つれづれ」の持つ本質はほぼ完璧にあきらかである。

4 「日くらし」は「ヒクラシ」なのか、「ヒグラシ」なのか。それがわからないと声に出して読むことができません。ひと昔まえまでなら、ここは「ヒグラシ」と読んで、〈一日中〉とか〈朝から晩まで〉とか口語訳することに決まっていたようなものでしたが、近年になつて清濁の読みわけがやかましく言われるようになり、根拠が得られたものは、従来の読みかたが訂正されています。「日くらし」についても、光広本の清濁表記を根拠にして「ヒクラシ」と読む注釈書が多くなつていようです。

これまでの検討によつて明らかになつたのは、この言いかたを、全体で一語の副詞とみなす立場と、名詞「日」と動詞「暮らし」との接続とみなす立場とがあつて、後者のがわが、もつぱら「ひくらし」という読みかたにこだわっている、ということです。北村季吟の『徒然草文段抄』のように、本文を「日くらし」としながら、「くの字をすみてよむ。終日也」という注を付けたものもありますが、「ひぐらし」と読んでいるのは、おおむね、副詞とみなす立場だとみてよいでしょう。

「ひくらし」か「ひぐらし」か、という点についていうならば、これがひとまとまりとして副詞化の方向をとりながら、最後まで「ひ」は名詞の「日」として、また、「くらし」は動詞「暮らす」の連用中止法として、それぞれの機能を独自に果たしつつづけていたとするならば、そのような状態において、複合の指標としての連濁が生じることはなかっただろうと考えるのが、証拠のない場合の穏当な推定のしかたでしょう。

☆「暮らし」自体に連用中止法としての機能があるというのは慧眼である。

5 「ものぐるほし」という形容辞は、接頭辞の「もの」を冠することによって、〈狂人のようだ〉とか〈発狂しそうな状態だ〉とかいう意味を婉曲に表現するということではなく、もつと、あるいは、もつともつと弱い意味で用いられているようです。『徒然草』の用例はここだけですが、平安時代の作品には珍しくありません。

「ものぐるほし」が〈ばかみたいだ〉であり、「ものぐるほし」が〈がちがいじみている〉だということなら、後者の語形は、意味の分裂——spirit——に応じて派生したものともみなすべきです。「くるほし」には母音転換が生じているために、もとの動詞の活用語尾が保存されていませんが、「くくるほし」の方は、「くるふ」に直接に結び付く語形であり、したがって、意味のうえでも、「くるふ」を連想させる度合いが強い、とい

う事実注目しなければなりません。特に、それが新しく形成された語形として登場すれば、印象はいっそう鮮明です。そういう表現価値を求めて、普通に進行する派生の過程を逆方向にもどして鑄造されたのが「ものぐるほし」だということでしょう。

もし兼好が、ここを〈がちがいじみた気分になる〉というつもりで書いたのだとしたら、「あやしうこそものぐるほしけれ」と表現しているはずだということです。したがって、ここに見える形が「あやしうこそものぐるほしけれ」となっていることは、くだいて言うなら、〈変てこで、ばかみたいな気分になってくる〉、すなわち、〈書いた自分があきれかえるような、とりとめのない事柄ばかりだ〉、ということであつて、いわば、軽い自嘲をこめた挨拶として読むべきことを意味している、と考へなければなりません。以下にいろいろと並べたてる事柄は手すさびにすぎないのだから、まともなことなど一つも書いてありません、ということですが。

☆「ものぐるほし」という語形を対照的に取り出したのはわかりやすく納得できる。

6 序段と第一段との関係のとらえかたにふたとおりあることについて序章に述べましたが、これまでの検討の結果に照らして、序段が謙遜の挨拶であるとしたら、それ自体で一つのまとまりをなしていることになりすから、第一段との間に切れ目があ

ると考えなければなりません。しかし、それにしては、第一段の最初の「いでや」ということばが落ちつきません。たいていの注釈書では、「いやもう」というような現代語訳が当てられています。このことばは、先行する部分を受けて、あらためて別のことを言う場合に使われるのが普通であつて、独立した文章の最初に立つのは不自然ですから、その点からみると、どうしても序段からの続きとして読みたいところです。『徒然草文段抄』以前の諸伝本がたいていここに切れ目を設けていないのは、そういう立場をとっているからでしょう。

ここは、いわば、付かず離れずということであつて、兼好は、いちおう型どおりの挨拶をしたうえで、ごく自然に、それを本題につないでいるとみるのがよさそうです。とりとめもないことを並べたてて我ながらばかしくなってくる、が、さて考えてみると困ったことに、という続きかたになっているということです。したがつて、陽明文庫本のように、逆接の含みを接続助詞「ど」によつて顕在化し、「あやしう物ぐるをしけれど、いでや、」としてしまったのでは、ちょうど二つの影が接近して周辺の薄い影が重なり合い、そこにここは、章段を切らず、改行もせず、その境界にあらわれた影の重なり、兼好の文章の巧みさを味わうべきところでしょう。」

☆「いでや」に注目し、序段と第一段との関連にふれるところなどは見事な捕らえ方である。

十二 結論

結論といつてもあくまで、「序章」としての結論であることを初めにおこわりしておく。

さて、大成を中心に、『徒然草』の問題点を追及してきたが、序段だけで相当な問題点が存在することが明らかになった。この一般的に流布された名高い序段が、そのありかたから、表現、内容について、これほどまでに問題点を含んでいるというのは一読者として、『徒然草』ファンとして、大変な驚きである。

そこに光を投げかけたのが小松英雄である。彼は『徒然草抜書』（講談社学術文庫）の中で、一見大胆に見える説明をしているが、実は緻密な正当な論の展開をしている。彼の書の内容について、重要な部分は抜粋しておいたが、本論文、また『徒然草』研究への大きなヒントであり、導きとなったものが小松の作品であることを明言しておく。

では序章としての結論を記しておこう。

「つれづれなるままに」で始まる序段は、独立しているものとは認め難い。これは「いでや」で始まる第一段につながっていくものである。

「つれづれなるままに」とは小松が言うように、うんざりとした、わだかまりのあるイメージを持った表現であろう。

では兼好はどうしてそのような書き出しをしたのだろうか。これは単なる謙遜の言葉などではなく、彼の、世の中に対する、うんざりとしたやるせない気持からおこったものだろうと考えられる。

彼は出家していた、見かけは僧侶である。僧侶とは俗世間を捨て去って、仏道という真の道を志すものである。ところが彼はあろうことか俗世間に心をひかれてしまう。いけない、いけないと思っても魅入られたように心は俗世間に傾いてゆく。それは何故か。当時仏教は古くからの奈良や京都を中心とした関西圏と、新興の鎌倉仏教を中心とした関東圏との対立があつた。旧来の伝統によりかかり、半ば腐敗している感のある関西圏に対し、日蓮や親鸞やを配する関東圏は、まさに新しい、「善人なほもて往生を遂ぐ、況や悪人をや」といった革新的なものであつた。

兼好は周知のとおり鎌倉にもやって来ている。そういった関東の雰囲気を感じた彼は、都の腐敗している仏教世界に対し、幻滅感を抱いていたのではないか。また腐敗した仏教世界に身を置き、僧侶らしきふるまいをしている自分にも嫌気がさすところがあつたのではないか。その思いが「つれづれなるままに」となつて「日くらし、硯にむかひて」となつていったのであろう。

「日くらし」は小松が言うように、意識的に一日を「暮らす」のである。だから、「日くらし」と濁らないのが正しく、「くらし」に連用形中止法の機能を残していると見るのが正しいのだ。

「心にうつりゆく」の「うつり」は「映り」であろう。ただし

「映つては消え」ではなく、どんどんいろいろな映像が、映り続けるのである。とどまることをしらないのである。「消え」はいらない。

それを兼好は、「よしなきこと」ではなく、「よしなしごと」という。意味的には「つまらないこと」であり、もちろんこれは謙遜の言葉であるが、「よしなきこと」では単なる形容詞の連体形「よしなき」が、名詞「こと」とつながつただけである。ところが「よしなし」という終止形をそのままに「こと」という名詞を（強引に）つなげ「よしなしごと」として一語の名詞にしまった。これによつて「よしなしごと」は「つまらないこと」という意味に重みをつけた。さらには「よしなし」が終止形としての役割、述語的な要素をもつたことによつて強調されたものが生き生きとしたうごめきをもつようになった。「よしなしごと」は、単なる「つまらないこと」を越え、問題点を含有するようになったのである。

「そこはかとなく」は、小松の説を取り入れ、どこを目標とすることもなく、限定しないでいつまでも続いて書き付けてゆく、というふうには捕らえておく。つまり問題点を含んだ「よしなしごと」がいつまでも尽きることがないというのである。

「あやしう」は「ものぐるほしけれ」を修飾し、「不思議に」とか「妙に」とかいう意味にとつておいて問題ない。

「ものぐるほしけれ」を「ものぐるはし」と対照させて考えた小松の論は説得力がある。「おばかさん」程度だというのは、まさに

そのとおりで、これが「気違いじみた」のでは兼好の人間性まで疑われてしまうだろう。俺って、馬鹿なことを書き付けているなあ、と感嘆するのである。しかしもちろんそれは本当に馬鹿だと思っ
ているわけではない。謙遜の言葉である。実に「よしなしごと」と「ものぐるほしけれ」のコンビネーションが絶妙な、単なる謙遜に
終らない、見事な謙辞となっている。

さて、ここまでの序段といわれている部分は、ある程度の分量を
書いてから清書する段階で付け加えたものだろうと考えられる。通
説に従えば、三十段程度を書き記してから、それらの内容をふまえ
て、最初におかれたのであろう。

では第一段との関係はどうなるかというところ、「いでや」というの
は、それだけで完結した表現と考えてみるとうまくいく。現代語で
言うならば、「いいや、もう、黙っていられないや、言ってしまうお
う」といったところなのである。序段にあたる部分で、俺ってばか
だなあ、こんなことを書いていいんだらうか、僧侶のくせして、と
述べておき、「いいやいいや」とワンクッションをおき、本論に突
入したと考えるのである。

僧侶が俗世間に「願はしかるべきこと」などを抱いてはいけない。
それで「いでや」がおかれたのである。最初の段のほうに「ありた
き」とか「あらまほしけれ」などという言葉が存在しているのは、
まさにその流れである。そういつておきながら、兼好は僧侶を否定
するかのとき論を展開する。兼好の言わんとしたことはそういつ

たことなのである。それが結果として全篇をつらぬくように書きつ
がれて、最終的二百四十三段（プラス序段）という大きなものとな
っていったといえよう。
(本学教授)

(追記) 本論文は平成14年度特別研究費の助成をうけた研究の一
部である。なお本論文の提出締め切りの10月15日の直前、9月28日
に母が他界した。拙い作品であるが、本論文を亡き母に捧げたい。